

国際移動家族におけるマイノリティ体験： 短期滞在者と長期滞在者の比較

竹田 美知

神戸松蔭女子学院大学人間科学部

Author's E-mail Address: m-takeda@shoin.ac.jp

The Experiences in Minorities of International Immigrant Families

TAKEDA Michi

Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University

Abstract

本研究の目的は、外国人の文化や生活の習慣の違いを直接に体験し外国人との交流を深めた国際移動家族に対して、インタビュー調査を行い、そのマイノリティ体験を浮き彫りにし、彼らの体験を対象として時間軸を中心に分析する。海外に在住する「国際移動した家族」(10 ケース) に対してインタビュー調査を実施した。2015 年 11 月にシカゴにおいて 3 ケース、2016 年 8 月にニュージャージーにおいて 7 ケースの聞き取りを実施した。

調査から、海外滞在者は、自分自身の所属するネットワークでエスニック・グループと交流した結果、様々なカルチャーショックを体験している。短期滞在者は、問題を解決するための人的ネットワークや時間が不足している。一方長期滞在者は、日本人ネットワークやコミュニティにおけるたくさんのエスニックネットワークを活用しながら問題を解決しているという結果が得られた。

The purpose of this study is to conduct an interview-based survey of Japanese families who have moved abroad and analyze their experiences chronologically, aiming to bring the minority experience into relief. We interviewed 10 families who had moved abroad and now reside outside Japan. We conducted interviews with 3 families in Chicago in November 2015 and 7 families in New Jersey in August 2016.

Based on the survey, overseas residents experienced various culture shocks as a result of interacting with ethnic groups in the networks to which these overseas residents themselves belong. Results demonstrated that short-term residents lack the human networks and time to solve problems, while long-term residents solve problems by drawing on Japanese networks and many ethnic networks in the community.

キーワード：ライフコース、アイデンティティ、エスニックグループ

Key Words: life course, identity, ethnic group

1. 研究の背景と目的

平成 28 年度法務省委託調査研究事業として実施された外国人住民調査報告書によると、「過去 5 年の間に、日本で外国人であることを理由に侮辱されるなど差別的なことを言われた経験のある人は、『よくある』が 2.7%、『たまにある』が 27.1% で合わせて 29.8% (1269 人) になっている。」と報告された (公益財団法人 人権教育啓発推進センター、2017)

グローバル化、個人化社会、リスク社会などよばれる現代社会において、社会全体の「不安」が高まっている (ベック、1998)。こうした社会全体の「不安」の高まりは 2000 年後半から「ネット右翼」や「ヘイトスピーチ」のように、国内に在住するマイノリティに対して攻撃的な行動をする人々を年々増加させており、先述の調査においても、「日本に住む外国人を排除するなどの差別的なデモ、街頭宣伝活動をしているのを見たり、聞いたりした経験について、『よくある』、『たまにある』を合わせると、『直接みた』が 20.3% であり、『テレビ、新聞、雑誌等のメディアを通じて見聞きした』が 42.9%、『インターネットで見た』が 33.3%」と高い率を示している。

このような外国人に対する差別をなくするためには、「最も多かったのは、『外国人の文化や生活習慣の違いを認めてお互いを尊重することを積極的に啓発する』が 60.9% であった。次いで多かったのが『地域社会の活動に外国人の参加を促すなど外国人と日本人との交流の機会を増やす』が 53.0% であった (公益財団法人 人権教育啓発推進センター、2017)」と述べている。

本研究の目的は、外国人の文化や生活の習慣の違いを直接に体験し、外国人との交流を深めた国際移動家族に対してインタビュー調査を行い、そのマイノリティ体験を浮き彫りにし、彼らの体験を対象として時間軸を中心に分析する。

2. 理論枠組み

国際移動とは、自分が所属している集団から出て、外の集団に一時的に逗留することによって、異文化と接触することをいう。国際移動の長期の機会として「出入国管理年報」において分類されている渡航目的のうち、「海外支店等への赴任」、「同居」、「永住」、「学術研究・調査」「留学・研修・技術提供」がそれにあたる。

国際移動が頻繁に行われる今日の国際社会では、国際移動を志向するかどうかによって、個人のライフコースが大きく変化する。「行って帰る」頻繁な移動では、その国の生活スタイルに慣れる時間もないままに、次の移動が始まることになる。短期間の滞在において移動先の人びととの交流を持つためには、国際移動に対するレディネスが必要である。

ところが、日本では、地域において子ども達が日常的に外国人と遊んだり、学校で机を並べて勉強したりする機会は乏しい。外国人との交流の実体験が少ない中で、外国人に対する

風評を鵜呑みにして、家族の中に外国人に対する固定的なイメージができあがり、そのイメージによって、子どもが成長過程で外国人と交流を持つ機会が少なくなる例もある。国際移動をする家族はマージナルな（越境的）存在といえるだろう。このようなマージナルな状況の中でマイノリティに対するイメージはどのように形成されるのだろうか。従来の研究の中からマージナルマンのアイデンティティー形成に関する仮説を挙げ、検討しよう。

1) パークの仮説

パークは、複数の文化を併せ持つマージナルマンの特徴を下記のように要約した（Park, 1950）。

- (1) 彼は、二つの文化にすっかりアイデンティファイすることが不可能なために、二つの価値観とライフスタイルの間で常に揺れ動くことになる。
- (2) お互いの「エスニック・グループ」に密接に関与しながら、「エスニック」な問題に非常に敏感になる。
- (3) 彼がマージナルな地位であるという自覚から自意識過剰な状態になりやすい。
- (4) 両方の「エスニック・グループ」の価値から自由になり、全力で関与するということはしない。客観的であり国際人である。
- (5) 彼はそのマージナルな地位ゆえに、客観的に評価をする、距離をおく、態度をとることが出来る。

2) モトヨシの仮説

モトヨシによると、周囲の環境も、下記のように、このマージナルマンとしてのアイデンティティー形成に大きな影響を与えている（Motoyoshi, 1990）。

- (1) 多民族的な近隣関係は、アイデンティティーを育成する時に、肯定的補強を与える。
- (2) 家族は子どものアイデンティティー確立を方向づけ、ストレスを減少する重要な役割を担っている。
- (3) 社会は「エスニック・グループ」の認知地図を持っており、人びとの行動に対する要請をこの地図に基づいて行なう。
- (4) この認知地図は「エスニック・グループ」に対するステレオタイプとなって他のグループから利用されることもある。
- (5) この認知地図は「エスニック・グループ」内で子どもを社会化する場合の手引きとなる。

3) ネイゲルの仮説—「エスニック・グループ」と認知地図—

ネイゲルはこの認知地図を次のように説明している（Nagel, 1994）。このような認知地図はエスニック家族だけにあるのではなく、どの家族にも文化の変数として認知地図はあるという。

- (1) 家族役割、コミュニケーションパターン、情緒的なスタイル、自己コントロール、個人主義、集団主義、精神性、信心深さなどについて潜在的な認知地図が形成されている。
- (2) 文化の役割は集団のある世代から次の世代へと受け継がれるライフスタイル（それが同じエスニティーであろうとなかろうと）を規定する。

以上、述べた仮説のように、認知地図がどのように形成されるかは、移動前に家族が国際

移動にどのように意味付けをしたか、国際移動の滞在期間、周囲の人的環境、地理的環境、経済環境などによって大きく異なる。短期的な移動であるか、長期的な移動であるかによって、移動先の文化との接触や地域の住民との交流、そしてそれぞれのケースにおけるアイデンティティー形成もおのずと異なってくる。

特に国際移動の滞在期間は、国際移動家族のマイノリティ体験に大きな影響を及ぼす場合が多い。すなわち、移動以前に外国人に対するステレオタイプが形成されることによって、国際移動に対する志向が非積極的になったまま、短期的な移動を社命によって強いられるケースもある。その一方で、国境を超えての移動を積極的に希望し、外国に一時滞在した人たちが受入国に定住、永住、そして帰化という道を進む長期的な滞在をするケースもある。

本稿では、国際移動家族のマイノリティ体験を、以上の理論仮説から「エスニック・グループ」への認知地図形成過程ととらえ、国際移動家族のインタビュー内容を分析する。

3. 調査方法

海外に在住する「国際移動した家族」(10 ケース) に対してインタビュー調査を実施した。2015 年 11 月にシカゴにおいて 3 ケース、2016 年 8 月にニュージャージーにおいて 7 ケースの聞き取りを実施した。

インタビュー調査に先立ち、神戸松蔭女子学院大学研究倫理委員会に研究計画審査を申請した。被験者に対する事前説明書の提示、同意していただけた被験者のみの協力・個人情報の保護などを留意し、被験者に与えるリスク回避をするため個人名はもとより個人が推測されるデータは取り除き、さらに被験者が調査結果にアクセスし確認できるように、対応した。

対象者の基本的属性として、居住地、国際移動理由、居住歴、滞在年数、家族構成、年齢、学歴、友人ネットワーク、職場関係、家族関係・情報の入手方法、ライフコースの段階を聞き取り、これらの基本的属性がマイノリティとしての差別された体験、差別体験の場所、時期、状況などにどのような影響を及ぼすかという問いを立てて、半構造化インタビューを実施した。

4. 調査結果

4-1 対象者の基本的属性

表 1 のように、シカゴに居住する A, B, C は、居住歴は 10 か月から 1 年半と短い。A に関しては過去に国際移動して海外居住した経験 (4 年間) はあるが、日本と海外を行ったり来たりする生活であり企業を通じての国際移動である。それに対して D, E, F, G, H, I, については、企業での移動によって海外赴任をしながらも、その後海外生活を続ける中で、現地での起業や退職後現地に留まる生活を送っている。そのため、海外滞在年数も A, B, C が 1 年と少しであるのに対して、D, E, F, G, H, I, は、12 年から 53 年と長期に渡っている。

海外生活におけるネットワークは、職業を持っているかどうかで大きく異なる。また仕事関係が日本人中心であるかどうかによって、友人ネットワークは異なっている。ライフコー

表 1

	A	B	C
性別	男性	男性	男性
居住地	シカゴ	シカゴ	シカゴ
国際移動 発令・状況	一度退職していたが、上司から電話があり次の日に返事をした	半年前に赴任が決定した。同じ部署の方がすでに海外赴任をしていたので自分も赴任の可能性があるが、自分には行きたくなかった。	発令時期は、3か月前から半年に言われ、妻はアメリカなら家族で移動に賛成だったが中国なら移動しないとされた
滞在年数	1年半	10か月（妻は3か月前に渡米）	1年半
家族人数 (同居続柄)	単身赴任(妻・子3人は日本)	2人（妻）	3人（妻・子ども1人3歳）
年齢	61歳	35歳	35歳
学歴	高校卒	大学卒（工学系）	大学卒（文系）
友人ネット ワーク	会社中心	会社中心	地域の日本人中心
職場関係	工場で作業手順を現地の人に教授	品質管理（細かいニュアンスを職場の人が感じ取れなく時間がかかる）	人事（言葉や文化の壁は感じるので簡単ではない）
家族ネット ワーク	子ども達も独立して妻は働いている	妻は来て間もないのでまだ出来ていない	子育てに関しては日本人の母親同士（同じ幼稚園）が協力しあっている。
ライフコース の段階	子離れ期	新婚期	子育て段階
今後の 滞在予定	1年半	3年から5年	3年から5年
国際移動歴	チェコに4年の経験	4歳から7歳まで香港に家族滞在	今回が初回

	D	E	F
性別	男性	男性	男性
居住地	ニュージャージー	ニュージャージー	ニュージャージー
国際移動 発令・状況	会社の駐在として、セールスエンジニアとして活躍しその後独立	研修生として2年半滞在中に会社に駐在員として5年勤務その後独立	最初は2年半、滞在中2度目は4年後に帰国命令が出た後、日本の会社を辞めてこちらに残った
滞在年数	53年	32年	38年（その間に一度日本に帰国し再渡米）
家族人数 (同居続柄)	2人（妻・子どもは二人独立してアメリカ）	2人（妻・子どもは2人で独立してアメリカ）	1人（子2人で日本）
年齢	79歳	68歳	69歳
学歴	中学卒業	大学卒業	
友人ネット ワーク	ビジネス中心	永住日本人同士・アメリカの地域の人との関係が中心	会社中心の生活
職場関係	ビジネスで成功をするために相手の欲しい知識を貪欲に吸収し独立して成功	駐在員時代はビジネス戦士として活躍、独立してからは地域との関係に目を配る	中小企業だったので、営業から仕事全般をみないといけない。
家族ネット ワーク	家族は日本人の友達や同じアジアの友達が多い	同じ州と隣接州に息子と娘がおり、密接に連絡している	妻は子どもの世話にかかりっきりで最初の赴任は大変だった
ライフコース の段階	子離れ期	子離れ期	子離れ期
今後の 滞在予定	日本に帰国の予定	日本に帰国するかどうか考慮中	アメリカの暮らしを楽しんでいる
国際移動歴	渡米するまではない	研修生として2年半後赴任	過去に移動したことがある

	G	H	I	J
性別	女性	女性	女性	女性
居住地	ニュージャージー	ニュージャージー	ニュージャージー	ニュージャージー
国際移動 発令・状況	駐在員の妻として	レストランの経営権 を得て開業したので 店を手伝っている	大学進学後こちらで 留学していた日本人 と結婚	国際結婚をして渡米 してから仕事を探し 日系の事務所に就職
滞在年数	31年	12年	26年 (学生時代を含めて)	17年
家族人数 (同居続柄)	2人 (夫と子ども2人)	3人 (夫・子1人)	4人 (夫・子2人)	5人 (夫・子3人)
年齢	62歳	48歳	44歳	43歳
学歴	大学卒業	大学卒業	大学卒業	大学卒業
友人ネット ワーク	近隣のアメリカ人・ 勤務先の職場の同僚、 保護者・日本語教育の 仲間	店の従業員関係と子 どものお母さんの ネットワーク	子どものお母さんと のネットワークが中 心	ビジネスと子どもの 関係のネットワーク
職場関係	日本語教師として働 くために、大学院へ 進学し教師免許を取 得した。管理職、職 場の同僚、保護者との 関係に気を使っている。	日本食レストランを 開業しているので、 日本人とのネット ワークが主	フリーで通訳をする とともにアルバイト もしている。	現地雇いの女性社員 同士で情報交換をする ネットワークがある。
家族ネット ワーク	夫は退職、子どもは 近くで2人とも結婚 し、娘には子供がで きて、同居して子育て を手伝っている。	日本好きの子どもの 留学先を見つけるた め情報を集めている。	夫の兄がアメリカの 高校。大学を卒業し 会社を日本で経営し ている。	最初、夫の家族と同 居していたが、その 後移動し子どもの教 育環境を考えている
ライフコース の段階	子離れ期・孫育て期	子育て中	子育て中	子育て中
今後の 滞在予定	日本に高齢の母のため に帰国することも考 えているが、孫の世 話をしているので当 面滞在中。	子どもは日本の学校 に進学予定である が、親は現地で滞 在予定	子どもの一人は日本 の高校の在学中、進 学先はアメリカ科日 本かは検討中	夫の仕事の関係もあ り、子どもの日本の 学校への進学は考 えていない。国際移 動の予定はない。
国際移動歴	過去に移動したこ とはない	過去に移動したこ とはない	過去に移動したこ とはない	過去に移動したこ とがある

スの時期によって家族ネットワークは変化し、子育て時期には子どもを中心にネットワークを形成しており、特に女性は子どもの教育のために日本人を中心としたネットワークを重要と考え、現地に短期滞在の人 (C) だけではなく長期に滞在する人 (H, I, J) も日本人の母親同士のネットワークで情報を交換している。

今後の海外滞在については、長期に滞在する人達 (D, E, G) も日本への帰国も選択肢の中に入っており、その理由は高齢の父母の世話や日本での暮らしやすさなどを理由にあげている。また H, I, J についても、子ども世代の日本留学を考えている。

4-2 マイノリティ体験

【A のケース】

A は、シカゴへ短期赴任をして1年半であるが、その前に4年間のチェコスロバキアでの滞在経験がある。

第1回目の赴任地であるチェコスロバキアでは、チェコ人以外にもベトナムやモンゴルから来た労働者とともに働いた経験があり、多くの国の労働者と人間関係を結んでいた。多文化的環境であったので、言葉はわからないでも、仕事の後、仕事の仲間で「飲み会」を計画して交流を深めていた。チェコでは、言葉の問題はあるけれども英語をわからない人も多かったので、技術指導は手順書を示して英語訳からチェコ語、モンゴル語といった多言語翻訳が基本となっていた、言語は多言語で複雑であったけれども、一緒に働いている仲間から家族ぐるみのパーティーに誘われて交流を深めていた。それゆえに、A は自分自身をマイノリティとして意識をしたことがなかった。会社自体もチェコの小さな田舎の町にあり、日本の会社ができて町に貢献していたから、日本人の会社の人ということで町の人が気軽に声をかけて、「ビールを飲まないか、タバコを吸わないか」と誘ってきてくれた。また、会社の立場も現地人より A のほうがマネージャーで上であったので、こちらの意見を通すことができた。

しかし、シカゴでは、日本の大きな会社が他にもたくさんあり、A が所属している小さな会社はあまり知られていない。会社主催のパーティーはあるが、同僚の私的なパーティーは少ない。またシカゴの同僚は共働きが多く、子どももいる共働きの人は、残業や仕事後の「飲み会」などは来られない (子どもだけで留守番をすることは法律で禁止されているので)。またシカゴのほうは、英語を話すのが当たり前と思っているので、こちらの肩書きがあっても、日本人の命令は素直になかなか聞かない。強く言うとパワーハラスメントととらえられる。またシカゴは現地会社を立ち上げて20年以上たつので、すでに現地人による現地会社のやり方が出来上がっているのので、新しく配属されてマネージャーとして、悪いところを指摘して修正をさせようとしてもなかなかできない。最終的な人事権を持ってないと、命令にはなかなか従わない。

【B, C のケース】

B の場合は、会社で直接かかわりのある現地の人一人しかいない。会社にいる現地人は日本人慣れをしているのか、聞こうとしてくれる姿勢はあるが細かいニュアンスが伝わりにくい。日本の会社にいる時と異なり、思いをすべて伝えられないというもどかしいところ

があると語り、Bはマイノリティとしての意識を持っている。仕事も人の命がかかる仕事なので神経を使っている。また、所得層が異なり人種も異なると、安全度が異なってくるが、自分たちが住んでいる地域は安全である。

Cも同様に現地人との関係に言葉や文化の壁を感じている。特に人事関係の仕事は人間関係を扱うので難しいと感じている。Cの子どもは日本人学校に通っているが、英語を話す人を英語人と呼び、たまに日本に帰りたいたもらしマイノリティとしての意識を持っている。

【Dのケース】

家が貧しかったので、医療精密機器の会社に就職した後、東京に転勤になりサービスの部門に配属された。外国から修理の技術修得をする人に教える機会があって、英語の必要性を感じて、1年間で自学自習をすると同時に日本在住の外国人から生きた英語を学んだ。

機会を得てアメリカに転勤になった時にDが痛感したのは、いくら技術を持っていてもセールスの配属であると英語が不得意だと販売促進ができないという事実である。そのために、Dはセールスの相手が求めている専門知識を自らが身につけて、相手に自分と交際すれば特をするという気持ちを抱かせた。セールスのテクニックでもあるが、モノを売ろうとしないで、売ってほしいと思わせる。そのためにはどうしたらいいかというと、相手の欲しがっている知識を持つことが大切で、「Dから買えば教えてくれる、Dと話をしていると勉強になる」と思わせることが大切だということ。そのためにはいつもDは勉強して本だけではなく、新しい技術を身につけて、問題に対する答えをいつも用意していた。

Dが渡米した1964年は日本からの駐在員も少なく、日本から見ると、駐在員はエリート中のエリートであった。Dが渡米した当時は、まだアメリカ人と日本人のふれあいが少なく、第2次世界大戦で、必ず一人ぐらい現地の人の親戚や友達が死んでいるか、腕の一本ぐらいを失くしてる時代であった。

Dは取引相手として、退役軍人病院 (Veterans Administration hospital) を廻ることも多かった。アメリカに100以上あるけれども、そこに入院している人はヨーロッパで戦った人もいれば、日本を相手に戦った人もいっぱいいた。せっかく国のために戦ったにも関わらず、ドクターはそのような人達に対して新しい医療器具を試していた。ドクターは自分の患者は大事だから新しい医療器具は使わないで、まずは退役軍人病院で試してデータをとり、それから自信を持ったら自分の患者に使っていた。入院している軍人は白人も黒人もいた。またそのような病院で働いている人はみんな安月給で仕事に不満を持っているせいか、サービスは悪いし院内感染はあるし清掃もよくされていなかった。そのような病院に長く入っている患者さんから、Dに対して「ユー、ジャップ!!」と言われた。日本人(戦った国の人)というだけでその後も不利を受けたけれども、Dは黙って睨みつけるようにして対応をしていた。

1965年か1966年の頃、Dがミシシッピーの田舎に行った時など、食事をしているとたくさん人がよってきて自分を見ていたとその頃を振り返る。「生きた日本人」が動くのを見たのは、彼らにとって初めてだったのではないかとDは言い、これは偏見ではなく、珍しさではないかと言う。しかし、アトランタで上流家庭の取引相手と家族ぐるみの交際をして、食事に招待されて行った時に、子どもが階段から降りてきてDのことを「ジャップ!ジャップ!」

と呼ばれた経験もあった。親は顔を赤くして子どもを怒っていたが、普段親からは、ミスターとかドクターとかの敬称で呼ばれていても、そのようなことが起きた場合は、その後の食事でも会話も成り立たなかった。このような経験から「表向き偏見なんかない、日本人もみんな同じ人間だと言っているけど、偏見は簡単に消えるものではない」とDは思った。

Dはさらに、まだニュージャージーに日本人がたくさんいない時に買い物に行くと、順番が来てさっと精算をすませようとすると、「No! Next」と順番を飛ばされた経験もあって、見慣れない国から来たというだけで差別された経験もある。

しかしDは、今のようにどんどん日本人が入ってきて、いろんな結婚があってブレンドして、日本人だか、白人だか、黒人だかわからないような状態になると偏見がなくなる可能性があると言う。「日本人というのはお金があって、礼儀正しい、暴力的ではないよお客」という信用ができれば、このような偏見も変わってくるという。しかし「すべて変化するかといえば、態度は変わっても根底にあるものは変化しない」とDは推察する。

現在でもDは、偏見のある扱いを受けたことがある。Dの妻が医者に行く時に同行したが、受付の黒人の女性が、自分がマイノリティであることが影響しているのか、英語があまり話せない妻に対してバカにした態度をとっていた。アメリカで偏見を受けている人ほど、偏見は強い。例えばユダヤ人はものすごい偏見を受けているのに、他の人種に対して偏見は強いと感じたという。特に言葉ができないと、口には出さないけれどもまた態度にもださなければ、偏見を受ける可能性が高いという。

Dは、先のアトランタの例のように、親の影響を受け、偏見を持つことが多いという。Dは偏見を受けて、それをどう受け止めるか、その反応に色々種類があるという。Dのアメリカ人の友達も、「日本人に対して偏見なんかないよ。」という人もいるし、日本人の友達も「私は偏見を感じたことはない」という人はいるけれども、それは偏見がないのではなく、偏見を感じる繊細さがなく、偏見を感じるセンサーがついていないだけだという。Dは普通のセンサーがついていれば偏見は絶対に感じるけれども、その後の反応が問題であると強調する。Dは、「日本人だからバカにされるのは仕方ないと思い、普通に交際する」とバカにされたまままで終わってしまう。けれども、Dが会社をやめて永住しようと考えたのは「そのような日本人だからという偏見は絶対に許さない。ファイナンシャルなレベルを上げて、偏見をもつアメリカ人尊敬されるような立場になろう」と決心したからだという。人間はロボットのようにリセットできないから、「三つ子の魂、百まで」というように偏見を持つ人はこころの根底の偏見は消えないけれども、その偏見は社会的地位が上がれば表面的には見えなくなるとDは言う。

またDによると、偏見は親からだけでなく、社会の中から生み出される情報からも生み出されるという。周りがあの人マイノリティで弱い立場にいるという、その言葉に振り回されて、「信用できないかな？」という情報が広まる。でもその情報は劇的に変化もする。例えば、乗合船でDが一人乗っていたりしてつりをしてしていると、理由もないのに移動する時に足をかけられたり、怒鳴られたりしたことがある。けれども、そのような人達も日本人から野球のヒーローがでると態度が変わる。野茂や松井、イチローにしても日本人の野球選手は

まじめで礼儀正しい人が多い。イチローがバットをきちんと置いていくような行動は、日本人に対する偏見を大きく変えているとDは言う。

Dは、このような偏見を変えていく日本人の姿を紹介しながらもDの近くに住む日本人の姿も冷静に観察している。4500人くらいいる日本人の駐在員のほとんどはエリート大学を卒業してバブルの頃大会社から派遣されてきたが、やはりみんな大きな世界を向いて住んでいるのではなく、ここに住んでいる日本人は日本社会のビジネス風土を持ち込み、商売をしているという。会社にいる時は高い地位で、駐在員となり社長になり、こちらの生活に慣れて「日本に帰るのが嫌だ」と思い、自分で現地で会社を作るといっても能力がないから成功した例はほとんどないという。自分の能力を勘違いしている日本人が多く、大きな会社を一度辞めてしまうとお金がない。さらに日本へ帰ろうとしても自分の住む家もなく、日本に帰ることもできないという。Dは日本から来るのであればショートステイが一番いいという。

このように長年アメリカに住みアメリカで成功したDであるが、2009年にリタイヤした。アメリカは戦場であるのでリラックスできないので、いずれは日本に帰ると言う。「日本だと、誰もあいつは日本人だとかジャップだとか偏見もないので、心が安らぐ」とインタビューを締めくくった。

【Eのケース】

Eは、娘がキンダーガーデンの時に、アメリカ人から砂を投げられた事件が偏見として記憶に残っているという。当時は日本人の赴任家族も多く補習校にも多くの日本人が通っていたが。その後の子どもの学校生活で苦勞したことはないと言う。子どもの親友も近所のアメリカ人が多く、子どもの伴侶もアメリカ人である。D曰く、アメリカ人にはたくさんの人種がおり、日本人を差別するのは低い報酬で低い地位の人たちだと言う。見かけ上日本人はアジア系として意識されるが、そのアジア系でもどうしてもぬぐいきれない人種の差別意識があるという。Dはアメリカで日本人として働いてきたので、日本人の地位を落とすような捏造的なニュース報道にはこれまで日本人が築いてきたことに対してマイナスになるようなイメージを与え、怒りを感じるという。また日本人として日本政府の対応が穏やかすぎることに疑問を感じる。主張すべき時には誇りを持って主張する必要があるとDはいう。

【Fのケース】

Fの子どもは、中学生になってから渡米したので、放課後自宅へ遊びに来るのはロシアの移民とか韓国人だけであった。オリエンタルだから差別されているのかと心配になっていた。しかし気のおける友達に聞くと、それはオリエンタルという理由ではなくアメリカ人でも遠くの州から引越してくるとなかなかそれまでのグループに入ることが出来ないといわれたので、差別ではないと納得した。Fの子は成績もよく卒業式では表彰もされたが、アメリカ人の友達は少ない。アメリカの教育には満足している。アメリカはどこの町の小学校でも、日本人やヒスパニック系やコリアンやロシアンといった移民のために、ESLの教育システムができあがっているという。「皆と違う人がいても教育はちゃんとする」ということが、子ども時代から徹底している。だから身体的なハンディーキャップ、言葉のハンディーキャップも含めて、ハンディーキャップを持った人達には対応するという考え方が浸透しているという。

そういう教育を受けたFの子どもは、日本に帰ってからバイリンガル、帰国子女というレッテルを貼られ、偏見を受け虐めを受けたことがショックだった。Fの子どもはアメリカで育ち、自己主張を身に着けたことによって、「帰国子女だから生意気だ。いばる。」と言われて苦労した。順番などをキッチンと守る習慣が日本では受け入れられなかったという。そのためFの子どもは、自分から努力して英語を忘れようとして20歳代後半まで「海外へ行きたくない」と言っていたという。

日本に来る外国人が増加しても、もともと日本人だけで暮らしてきたからハンディーキャップを持つ人の中々日本社会は受け入れないとFは言う。たとえば、目の悪い人に対してそれぞれみんなが何かしてあげようとしてもなかなか恥ずかしがってしないから、ホームへ転落する事故が絶えないという。それに対してアメリカ社会は皆と違う人がいるのは当たり前でみんなを守ってあげている社会だと感じているという。たとえば、日本では一つのスポーツで成功させようと子どもを努力させるけれども、アメリカはいろいろなシーズンでいろいろなスポーツにチャレンジをさせ運動の不得意な子にもチームの仲間がサポートして助けるところが大きな違いであるという。それは会社組織でもそうで、多様なケースに対して不都合があってもルールを変える事は難しい。Fによると、日本は変化や多様性に対応することが難しい社会なので、子どもは日本にいても、自分自身はアメリカに住むことにしたという。

【Gのケース】

Gは最初東海岸へ夫が駐在員として渡米し、家族で移動してきた。その頃車が一台しかなかったのが足がなく、秋から冬へと季節が移る時だったので、子どもがいて家に閉じこもりしかなく閉ざされた感じになって泣いて暮らしていたとその頃(30年前)を振り返って言う。現在のように、市民権をとって現地の高校の教師として働いているGの澁刺とした姿からは想像できない。その時はGは日本に帰りたくて、日本が恋しくて仕方ない気持ちであったという。たまたま初めて住んだところも行き止まりの場所で人通りも少なかった。日本人家族も子どものナーサリーにいたけれども、たまにしか遊ばなかった。

西海岸にGの夫が転勤になると、明るい世界に行った気持ちになって、アジア系や日本人がたくさんいた。日本人がたくさん住んでいる安全なコンドミニアムに住むことになった。日本人がたくさん住んでいたのも、当時イエローヒルとか呼ばれていた。車も2台になり、日本語系の学校に子どもの通わせ、向かいも日本人の家族が住んでいたのも楽しかった。3年ほどその生活が続き、また東海岸に夫の仕事で移動することになった。

2回目の東海岸に移動した時はちょうどバブルの頃で日本人がたくさん来ていたので、多くの日本人家族の中から自分とあった人と付き合えばよかったので気が楽だった。夫がグリーンカードを取得するのに一時日本に留め置かれていた時も、日本人家族の奥様たちとお付き合いができていたので不安は少なかった。Gは、子どもの教育も考えると英語を上達しないといけなかったので、意識的に現地の人達と交際する機会を作っていた。まず、新しくその地域に入った人たちが地域に慣れるために月に一度一緒に何かを見に行ったり、食べに行ったりする会(ウェルカムワゴン)に参加した。また地域の図書館で英語を教わったり、学校の

図書館でのボランティアをしたりして積極的に地域での活動をしていた。その後、Gがガールスカウトのリーダーとなる機会があって、最初は小リーダーとなり、地域の現地のリーダーとともに行動するようになり、現地のアメリカ人と仲良く交際するようになった。

子どもが中学生になっても、アメリカでは送り迎えは必須なので、Gはカープール（近所のお母さんと共同で送り迎えをするグループ）に入り、住んでいる近所のブロックの人達と子どもを通じてさらに仲良くなっていった。その後、大学の全米の日本語の通信教育プログラムに参加し日本語を教授する機会を得て、さらに大学院で日本語教授法の学位を得た。大学やコミュニティスクールで教鞭をとる中で、現在の高校での教師のポストが空き、州の教職免許を取って働いている。

今の高校は大学進学率も高くレベルの高い高校なので、成績にすごく敏感な親が多いとGはいう。日本が経済的に発展しビジネスで日本語が必要であった時代は去り、アニメなどのサブカルチャーや日本文化に興味があり日本語を選択する生徒が増加している。親同士、子ども同士で、情報交換をしており日本語での高い成績を期待してGの授業を取る生徒が多いとGはいう。日本へ生徒を引率して行くと、日本流のおもてなしや街が清潔であること、人が優しいし交通機関がきれいである安全であること、食べ物（ラーメンや寿司など）がおいしいこと、アニメなどのサブカルチャーに惹かれることが好評で、リピーターが多い。

アメリカで体験したことで感じるのは、アメリカには多様な移民がいるから色々な見方があるって、一つの物事が起こっても色々な反応をするので自分自身の視野が広まったという気持ちがあるとGは言う。今は日本語放送もあるので比較できるけれども、報道の仕方一つでもこちらの方（アメリカの方）が多様で自由であると感じる。例えば東北の震災ひとつをとってもアメリカのほうが結構細かい映像を写していた。日本のほうが、映像も押さえてここまでといった限界があったように思う。

またGによると、日本人は「グローバルな感覚を身につけないといけない」という傾向があるけれども、アメリカ人のほうはあまり国際化に対して敏感でなく、またアメリカ国内しか行った経験のない人も多いという。教育レベルにもよるのだけれども、アメリカ自体が国際舞台だから、世界に出て行かなくてはならないと思う人は少ない。

Gは、日本と違って、アメリカでは「自分がなにかやりたい」と思ったら、その方法や実現の時期などは細かいところまでは他人が口をださないで、マイペースでやれるところが利点であると感じている。だから日本に帰って仕事をしたいと思うけれども日本流の働き方になれるかどうか少し不安を感じている。

【Hのケース】

Hは、夫の海外赴任に帯同して渡米した。夫はその後退社して、マネジメントの会社を経営している。Hのお子さん（当時4歳）は、いきなりキンダーガーデンに入り、算数や、体育、音楽などのたくさんの教科があり適応できなかったので泣いて大変だった。まだ言葉も話せないの、「なんで泣いているのか？」とHに通訳してくれと先生から何度も学校によばれた。近所に日本人の子どもも少ない中で、クラスを同じにしてもらったりして慣れるまでに最初2、3年かかった。現地校に通っていたHの子どもは滞在の最初からマイノリティとして学校

生活を送っていた。Hの子どもは現地校より、日本人補習校のほうが好きでそこで日本人の友達に会って、日本語で好きなだけアニメの話やゲームの話をしていった。

日本に体験入学した経験もあるが、日本に帰ると「これは英語でなんというのか」と絶えず聞かれるのでわざとカタカナ英語を使い、流暢な発音を隠していた。小学生時代はアメリカでも日本でもマイノリティ意識を感じるが多かったようだ。

そのうちに日本のサブカルチャーがアメリカでブームになると、アニメ好きなアメリカ人と情報交換をする中で、日本語でアニメを理解できることがうらやましがられる。アニメやゲームでアメリカ人から尊敬されるようになると、日本人であることが誇りとなっていった。特に日本人の少ない街にいたので、日本人と友達になりたいとアメリカ人からリクエストされる。当初学力の面で負い目を感じていたことが、今は日本人であること、日本語ができることがHの子の自信につながっているという。

【Iのケース】

Iは、18歳でアメリカの大学に進学するために渡米し、夫も高校2年で夫の兄がアメリカの高校に留学していたので兄に続いて渡米した。大学卒業後もアメリカに滞在し現在フリーランスの翻訳者をしている。Iの上の子どもは、アメリカで生まれ、今日本の高校へ通っている。Hの子と同様、アニメやマンガなどが好きでそれゆえ日本のサブカルチャーにあこがれて日本の学校へ行くことを自ら決意した。Iの住んでいる地域は、コリアンが多く、Iの仲の良い子もだいたいコリアンでアジア系が多い。あとは中国系や、ロシア系で仲の良い子もいるけれども彼の友達で共通しているのが、アニメ好きというところである。Iの上の子は日本人補習校に通っている時に自分で関東圏の寮のある学校を調べて日本の学校に行くことを決めた。Iも夫も留学の経験があるので、アメリカから日本の学校に行くことを反対できなかった。今回Hの子の受験を通して思ったのは、日本では英語力を高く評価する傾向があり、面接での決め手は英語力と人間性であったということだった。Iの子は小学校で体験入学してさんざん「英語を話してみて」といわれ、ひとりで何を話したらいいのかと思い、嫌だった経験を持っているので、Hは編入した英語の時間に「英語を話してみて」といわれるのはすごく嫌ではないかと心配している。

Iの下の子どもは、上の子のように日本語補習校は好きでなく、日本語の勉強を辞めたいといいながら、親の教育方針で何とか現在も補習校を続けている。

【Jのケース】

Jは国際結婚をして渡米し、ニュージャージー州の南の方の夫の実家に住んだ。その頃（1999年頃）は治安が悪かったので外は歩けなかった。アジア人だと目立つので夫から「外を歩くな」といわれ、Jが一人で歩くと目立つので何かされるといけないということでずっと家にいた。最初は日本の財団に勤務し、オフィスでの対応の仕方が日米で異なることを体験した。その後、フルタイムの職業を得るために日系企業に就職し、その企業の移転に伴い退職した。勤務先まで通勤が便利な日本人の多いところへ移動したので、Jは現在日本人のお母さんのネットワークにいろいろな意味で助けられている。移動してきた時は上の子どもが2歳でその時は上の子どもだけであった。今はその子どもが高校に行く年齢になったが、ずっと現地校に通

いくつか補習校にも行っていた。上の子どもが中学校の時代に日本文化が好きという子どもが多くいて、ユーチューブやネットで自分達の好きな漫画を見て日本語まで修得してしまう。そういう子どもはアジア系（韓国系、中国系など）が多い。

子どもたちの外見は日本人らしくないので（夫が外国系なので）、インド人と間違えられた経験もあり、日本語を話すと現地の子も日本人の子もびっくりする。一番上の子は幼稚園からそういう経験があり、今では上の子どもの友達のお母さんはだんだんわかってきている。途中で引っ越しをしたこともあったので、学区の違う初めての学校に行くと日本人というのは誰も知らないのでも驚かされている。子どものことを考えると、日本では、外国人の外見をしていると日本人として生きているのに外見のために外国人として見られるというアイデンティティー・ギャップもあり、アメリカに移住することを決心した。子どもにとってどちらが住みやすいかな？と考えると、Jは子ども達にとって日本は住みにくいと思っている。もちろん日本とアメリカを家族で行ったり来たりしているが、子どもの学校のことを考えると、アメリカの高校はその土地の高校に必ず入れてくれるが、日本は受験して高校には入らないといけなくて大変だという。日本から来た人たちは、受験があるから子どもが中学生の時に帰国し駐在組が少なくなっているという。

アメリカの高校の1年は日本の高校の1年とは異なり、1年抜けると大変なのでアメリカの大学受験のことを考えると結構大変になる。高校で日本へ留学するケースと比べて大学でアメリカから日本へ留学する人は多い。

J自身は高校のときに交換留学で1年アメリカに来た経験があるが、その時のカルチャーショックが大きく精神的にも鍛えられた。ユタ州だったので90%がモルモン教であった。その後、アメリカで仕事をするにも宗教が大きな役割を果たしていると感じた。ユタにいたときは、モルモン教のことばかりを考えていたらよかったけれども、東海岸ではメトロポリタンということで、キリスト教だったり、モスリムとか、ユダヤ教だったり、気にしなければならぬ。日本は宗教を毛嫌いするきらいがあるし、Jも避ける傾向にあったが、アメリカでは会社で仕事をするには、宗教のことを話すのはいいけれども、攻撃的なコメントはしてはいけぬ。アメリカでは宗教トレーニングを受けるけれども、日本のほうはあまり気にしなくまた防御もしない。そういうところが日米の差だと思うとJは語る。

5. マイノリティ体験を通しての認知地図の形成

短期滞在者であるA、B、Cは、会社の組織としての「エスニック・グループ」と交流しているが、家族は現地の日本人中心のネットワーク内で生活しており「エスニック・グループ」と積極的に関わる段階まで達していない。会社の「エスニック・グループ」との関わりにおいても、Aの言うように「肩書きがあっても、なかなか命令をきかない」人間関係であり、Bのように「日本の会社にいる時と異なり、思いをすべて伝えられないもどかしい思い」を感じ苦勞している。Cも「現地人との人間関係に言葉や文化の壁を感じている」といい、パークの仮説のように、日本の職場文化とアメリカの職場文化の価値観の中で揺れ動いている。Aの語りのように、会社の地域における知名度や貢献度が、AやB、Cの地域の人間関係に

大きな影響を及ぼしている。しかし何よりも、長期滞在をしたDやGのように、時間をかけて地域での自ら人間関係を築いていくことがまだできていない段階であるともいえる。

Dは、パークのいうように、ビジネスの世界で「エスニック・グループ」に密接に関与しながら、「エスニック」な問題に非常に敏感になり、問題に対峙してきた。1964年当時、日本からの駐在員も少ない時代、人々の心の中に第2次世界大戦の爪痕が残る中で「ジャップ」と呼ばれ、対等な人間関係を築くために相手の欲しがる知識や技術を努力して身に付けてながらも、差別や偏見を目の当たりにして「表向きは偏見などない、日本人も同じ人間なのだと言っている、(偏見や差別)は簡単に消えるものではない」と何度もマイノリティ体験を通して感じとっている。Dは、このようなマイノリティ体験を感じ取るセンサーの敏感さこそが、その後の偏見や差別を乗り越える基本であるという。Dは「三つ子の魂百まで」という諺を引きながら、モトヨシの仮説のように、偏見や差別は親から植え付けられることが多いが、「心の根底の偏見や差別は消えないけれども、(自分の)社会的地位が上がれば表面的には見えなくなる」という。ファイナンシャルな報酬レベル上昇や礼儀正しさや信用といった社会的地位の上昇がその偏見や差別を乗り越えるための手段だという。特に社会的地位の上昇には、大リーグでの日本の野球選手の活躍や礼儀正しさが社会情報の変化を促すキーとなっているという。たとえ、マイノリティとして弱い立場にいるエスニック・グループの悪い情報が社会に流布されていたとしても、一人のヒーローの出現でその地域に住むマジョリティの人達の認知地図は劇的にいい方向へ変化するという。ネイゲルのいうような潜在的な認知地図も、その地域においてマイノリティの中から一人のヒーローが生まれることによって刷新されると説く。

認知地図を刷新するのは、ヒーローだけではない。HやIやJの子どもはインターネットの普及によって日本のサブカルチャー(アニメやまんがなど)に関する若い世代の評価が高まり、日本人であること、日本語ができることがアメリカで学校生活において彼の自信になっているという。Iの子どもは日本のサブカルチャーにあこがれて、現在日本の学校に通っている。

Eは、反対にどんなに日本人が努力して現地で築き上げた地位も「日本人の地位を落とすような捏造的なニュース報道はこれまで日本人が築いてきたことに対してマイナスになるようなイメージを与える」という。マイノリティに対する認知地図は、親の影響を受けた潜在的な認知地図が、社会的な情報の流され方で大きな変更が加えられ、プラスにもマイナスにも変更される。

Gは、渡米当初は閉ざされた生活を送っていたが、その後日本人との交流を得て生活ネットワークを開いていき、子どもの教育のために現地のコミュニティの人達と夫婦で交流を持つ機会を積極的に持ち、ボランティアやガールスカウトのリーダーをしつつ、現地の近隣ネットワークに溶け込んでいった。Gは、モトヨシのいうように、「子どものアイデンティティー確立を方向付け、ストレスを軽減するためにコミュニティの中でのリーダーとしての役割を果たした」といえよう。現在は日本語を教える教師として日本の文化を現地に紹介する役割を担っている。Gはこのような経験を通じて、パークの仮説で述べられているマージナルマ

ンの特徴「すなわち、客観的に評価する、距離を置く態度」を身に着けることができた。Gは、アメリカ生活で一つの物事に対していろいろな見方をすることができ、視野が広まった気持ちがあるという。

Jもアメリカで職を得て働く中で、現地の上司の下と日本の上司の下での働き方の違いを経験し、文化の差を感じたことを語っている。特に日本では宗教に関して比較的無頓着であるのに対して、アメリカでは多民族国家なので、仕事をする際にも宗教が大きな役割を果たしており、宗教に関する研修もあることから日米の差を感じている。多民族国家の中で仕事をする上でいろいろな立場に人に対してGと同じく「客観的に評価したり、距離を置いたりする態度」を身に着けたと語っている。

Fは、海外生活を送った日本の子どもたちが帰国子女として帰った時に、逆に日本に対する認知地図を書き換えるという。Fの子どもは、「バイリンガルで、帰国子女だから生意気でいばる」というレッテルを貼られ、日本において虐めを受けた経験を持つ。そのためせっかく身に着けた英語も忘れようとしたという。Hの子ども、小学校時代に日本に一時帰国して、「帰国子女＝英語が得意」というステレオタイプを押し付けられ、次第に流暢な発音を意識的に隠すようになり、母国でありながら日本でもアメリカでもマイノリティ意識を持ったという。Iの子どもも同様に小学校時代の体験入学では英語がクローズアップされ、「英語で何でも話してみて」と懇願されて困った経験を持っている。

モトヨシの仮説にあるように、「帰国子女」というステレオタイプが日本では成立しており、FやHやIの例のように比較的早い時代（小学生時代）から潜在的な認知地図が成立し、おそらく親やピアグループからの社会化によって手引きされ成立している。

6. 結語

短期滞在者は、自分自身の所属する最も近いネットワークでエスニック・グループと交流し、様々なカルチャーショックを経験しているが、そのカルチャーショックを解決するために、身近なネットワークをさらに広げる時間も人的資源も不足している。

長期滞在者は、ビジネスにおいての人間関係や子育ての中でマイノリティ体験を積み重ね得た日本人ネットワークやコミュニティのたぐさんのエスニックネットワークを活用しながら人的資源を得て文化的な摩擦からくるストレスを減少させている。また現地に長く住み、ファイナンシャルや地位や社会的地位の上昇を図り、偏見や差別を乗り越えている。しかし家族から植え付けられたマイノリティに対する認知地図は潜在的に存在しており、マイノリティに対する社会的風評によって良くも悪くも変化している。

海外滞在者が日本に帰国した時に、日本人でありながら「帰国者や帰国子女」としてラベルを張られステレオタイプを持たれていることは、日本人でありながら「住みにくい日本」「働きにくい日本」といったイメージを持つことになり、逆カルチャーショックのような現象もみられた。その一方で日本のサブカルチャーが現地で同年代の現地のピアグループに支持されるにしたがって、日本の文化に誇りを持ち「日本に住みたい」、「留学したい」という若い世代が増えている。いずれにしろ海外滞在経験を積むことは、パークヤモトヨシの仮説が示

すようにマージナルマンとして、外から日本を客観的に眺めることができる価値観を育てることが確認された。

この研究は平成 29 年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究） 課題番号 15K12310 「国際移動家族におけるマイノリティへの意識の変化—移動前と移動後の経時比較—」の助成による研究成果である。

文献

1. バック, ウルリヒ 東廉・伊藤美登里訳 (1998) 『危険社会—新しい近代への道』法政大学出版局
2. グッドマン, R. 長島信弘・清水郷美訳 (1992) 『帰国子女—新しい特権層の出現』、岩波書店
3. 原沢伊都夫 (2015) 『異文化理解入門』研究社
4. 広田康生、藤原法子 (2016) 『トランスナショナル・コミュニティ』ハーベスト社
5. 公益財団法人 人権教育啓発推進センター 「平成 28 年度法務省委託調査研究事業外国人住民調査報告書」2017 年 6 月更新 <http://www.moj.go.jp/content/001226182.pdf> 2017 年 11 月 30 日引用
6. 小島奈々恵・深田博己 (2011) 「帰国子女のホスト国適応と母国再適応—アメリカからの帰国子女—」 広島大学心理学研究 第 11 号
7. 松尾知明 (2011) 『多文化共生のためのテキストブック』明石書店
8. Motoyoshi, M.M., 1990, The Experience of Mixed-Race People: Some Thoughts and Theories, *Journal of Ethnic Studies*, 18 (2):911-914
9. Nagel, j., 1994, "Constructing ethnicity creating and recreating ethnic identity and culture", *Social Problems*, 141:152-176
10. Park, R.E., 1950, *Race and Culture*, New York; Free Press (The collected paper of Robert Ezra Park)
11. 竹田美知 (2013) 『グローバリゼーションと子どもの社会化—帰国子女・ダブルスの国際移動と多文化共生—』学文社

(受付日: 2017. 12. 11)